

第45期富士見市民大学公開講演

「俳人の旅」

～ 芭蕉・蕪村・一茶の紀行 ～

講師：谷地 快一氏

令和5年

10月7日(土)

13:30～15:30

鶴瀬公民館



日 時	10月7日(土)	13:30～(13:00 開場)
会 場	鶴瀬コミュニティセンターホール	
講 師	谷地快一(たにちよしかず)氏	東洋大学名誉教授
費 用	無料	
参加者	66名	

講演会次第

1. 司会より挨拶及び、講師紹介
2. 谷地快一先生 ご講演
3. 司会より謝礼、挨拶

公開講演会テーマ

「俳人の旅」-芭蕉、蕪村、一茶の紀行観-



講演内容

昨年の講座は与謝蕪村の世界を講じたが、難しかったようだ。そこで今年は親しみやすさで定評のある小林一茶を取り上げ、参加者が俳句を作る試みをまじえて話をした。

「俳人の旅」という公開講演はそれを踏まえたもので、芭蕉の人生観や旅観をもとに、異なる個性の蕪村と一茶の旅について考えた。すなわち、「芭蕉を尊敬するが美化はしない」という蕪村と、「自分は芭蕉という先達の脛(すね)をかじって生きてきた」という一茶の違いである。

そして、地元富士見市を含む川越街道を通過した一茶の「草津道の記」の紹介をしつつ、スローライフ（丁寧に暮らすこと）を提唱した。



令和5年度 富士見市民大学公開講演会
「俳人の旅」一芭蕉・蕪村・一茶の紀行観

アンケート集計結果

参加者 66名

申込者実参加者	48人	(申込総数 56 : 欠席 8)
当日参加	8人	
スタッフ	10人	(理事 8、手話関係 , 公民館 , 講師)
参加者合計	66人	

アンケート集計結果

講演会受講者数	56人	(実参加者+当日参加)
アンケート回収	40人	
回収率	71.4%	

1. 講演会について

項目		満足	普通	不満足	合計	満足度
1	内容について	30	8	0	38	78.9%
2	講師について	31	5	0	36	86.1%
3	スタッフの対応について	20	16	0	36	55.6%
合計		81	29	0	110	95.5%
満足度		73.6%				

不満について

- ・90分の枠に収まるようなテーマにしたら。(一茶だけにするとか)
- ・印刷物が見にくかった。
- ・話は面白かったが時間が足りなかった。詳しく知りたいと思いました。
- ・1時間30分短いかも。
- ・現行の文字がみずらかった
- ・2枚の用紙どうりのお話をお願いしたい。
- ・時間が足りない、もう少しゆっくり聞きたい。



感想・ご意見

- ・言葉がはっきりわかりやすい。
- ・時間がなくてもったいなかった
- ・自分の足で歩く。スローライフ、言葉で置き換えてゆく一日を俳句する、勉強になりました。

- ・とても楽しく聞けました
- ・江戸時代の3人の共通点、き風、キーワードの概略説明が欲しかった。
- ・谷知先生 来年もよろしくお願いします。

2. 来期以降の講座、講演会について、取り上げて欲しいテーマテーマや講師名などを記入下さい

- ・先生の好きな今の俳人の作品を取り上げる。
- ・俳句の上達の仕方。季語というもののシステム。
- ・再度この続きを聴きたい。中身が濃く、時間が足りない。
- ・奥の細道
- ・谷知先生の「つれづれ草」等
- ・地域の歴史、戦国史、落語の歴史
- ・安しい経済学、健康について。
- ・小林一茶の講座を聴きたい。

3. 本講演をどこでお知りになりましたか。

順位	項目	人 数	割合 (%)	前回
1	掲示板ポスター	9	23%	29%
2	市広報	13	33%	29%
3	市民大学からのお知らせ	13	33%	35%
4	お知り合いからのお誘い	3	8%	3%
5	その他（鶴瀬公民館 他）	2	5%	3%
合 計		40	100%	100%

4. 回答者の属性について

①性 別

項 目	男性	女性	他	合計
性 別	17	21	0	38
割合 (%)	45%	55%	0%	100%

②年 齢

項 目	50歳以下	51～60歳	61～70歳	71歳異常	合計
年齢 (人)	1	1	6	24	32
割合 (%)	3%	3%	19%	75%	100%

③お住まいの地域

順位	地 域 名	人 数	割合 (%)	前回
1	鶴瀬・関沢 地 域	8	21%	27%
2	みずほ台 地 域	12	31%	15%
3	ふじみ野 地 域	8	21%	27%
4	上 沢 地 区	1	3%	3%
5	羽 沢 地 区	2	5%	6%
6	渡 戸 地 域	3	8%	9%
7	鶴 間 地 域	1	3%	0%
8	山 室 地 区	0	0%	0%
9	三 芳 町 地 区	3	8%	9%
10	水 谷 地 区	1	3%	0%
11	南 畑 地 域	0	0%	0%
12	諏 訪 地 区	0	0%	0%
13	都内		0%	3%
合 計		39	100%	100%

5. 富士見市民大学全体に関する要望など御座いましたらご記入ください。

- ・準備ご苦労様でした。今後ともよろしくお願いします。
- ・また谷知先生を読んでください。
- ・南畑地区の詳しい話を聞きたい

6. 当大学の受付・資料の印刷などのお手伝い又は企画運営の活動(担当理事として)に興味をお持ちの方、ご協力いただける方は、お名前・ご連絡先（電話）をご記入ください。

講演会配布資料

令和5年度富士見市民大学公開講演会

於鶴瀬公民館（コミュニティセンターホール）／二〇二三・一〇・七

俳人の旅芭蕉・蕪村・一茶の紀行観

谷地快一

【本日の話】川越街道を通った小林一茶の「草津道の記」の紹介を中心に、芭蕉における旅という生き方を継承しつつ、俳諧を通して丁寧な生きようとする蕪村と一茶の作品を読みくらべる。

【芭蕉の紀行観】そもそも、道の日記にきというものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるい情じやうを尽してより、余ようはみな佛似

かよひて、その糟粕さうはくを改むることあたはず。まして浅智短才の筆に及ぶべくもあらず。その日は雨降り、昼より晴れて、そこに松あり、かしこに何という川流れたりなどいうこと、たれたれも言ふべく覚えはべれども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば言ふことなかれ。されども、その所々の風景心に残り、山館・野亭の苦しき愁ひも、且つは話の種となり、風雲の便りとも思ひなして、忘れぬ所々、後や先やと書き集めはべるぞ、なほ酔へる者の妄語にひとしく、いねる人の謔言うわごとするたぐひに見なして、人また妄聴せよ。（『笈の小文』）

▼「紀氏・長明・阿仏の尼の」文とは『土佐日記』『東関紀行』『十六夜日記』をさす。

【芭蕉の死生観】月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老を迎ふる

者は、日々旅にして旅を住みかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海浜にさすらへ、去年こぞの秋、江上かうしやうの破屋はおくに蜘蛛の古巣ふるすを払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関超えんと、

そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神だうそじんの招きにあひて、

取るもの手につかず。股引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里きうに灸すきううるより、松島の月まづ心にかかり

て、住める方は人に譲り、杉風さんふうが別墅べつしよに移るに、「草の戸も住替る代ぞひなの家」表八句を庵の柱に掛けおく。（『おくのほそ道』深川出庵）

【『おくのほそ道』象潟】朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因嶋のういんじまに舟をよせて、三年幽居いうきよの跡を

とぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。かたみ（『おくのほそ道』象潟抄出）

▼「能因嶋」とは「世の中はかくてもへけり象潟の蟹の苦屋を我が宿にして」（能因・後拾遺集・羈旅）▼「花の上こぐ」とは「象潟の桜は波に埋もれて花の上こぐ蟹の釣舟」（伝西行・継尾集）

【芭蕉の足跡をたどる蕪村】出羽の国よりみちのくのかたへ通りけるに、山中にて日くれければ、からうじて

九十九袋やしやぶくろといへる里にたどりつきて、やどりもとめぬ。よすがうすづらごとごともののひびく音しければ、あやしく

て立ち出で見るに、古寺の広庭に老いたるをのこの、麦うすつを春うすつくにてありけり。予もそこら徘徊しけるに、月孤峯の影を倒し、風千竿の竹を吹きて、朗夜のけしきいふばかりなし。このをのこ、昼の暑さをいとひて、かくいとなむなめりと。やがて立ちよりて、名は何といふぞと問へば、宇兵衛と答ふ。「涼しさに麦うくよを月夜の卯兵衛かな」（「月夜の卯兵衛自画賛」）

【芭蕉の足跡をたどる一茶】日も西海にかたぶきぬころ、旅宿をもとめて、先づは一見せばやと小舟さおに棹さおさして、はるか湖中に浮かみぬれば、昏くまれいそぐ里人、我が家へ帰るありさま、目のあたりなりけらし。「象潟や島がくれ行く刈穂船かりぼふね」（寛政元・八

「象潟旅宿」抄出

【季語はなぜ必要か】西行の和歌における、宗祇の連歌れんがにおける、雪舟せつしゅうの絵における、利休が茶における、その貫道するもの

は一なりいっ。しかも、風雅におけるもの、造化さうくわにしたがひて四時しじを友とす。（『笈の小文』冒頭）

▼以下解説です。「風雅」とは〈俳諧〉のこと、「造化」は〈宇宙の万物が生滅を繰り返して、限りなく存在してゆくこと〉、

「四時」は〈春夏秋冬〉のこと。つまり芭蕉は〈俳諧（俳句）は生々流転しやうじゆうてんの道理に逆らわず、四季の移り変わりを受け入れる領域である〉という。そうすれば、「見るところ花にあらざといふことなし、思ふところ月にあらざといふことなし」と続けている。天地自然に従順に、あるがままを受け入れて暮らすことで人

生は豊かになるという見識。蛇足を加えれば、その方法（態度）を「写生」といい、その味わいを「軽み」という。実見と寛容といい替えることもできる。

【一茶「草津道の記」】文化五年（一八〇八）六月二五日に江戸を出発し、二十九日に上州草津温泉に至る紀行。

なお、七月二日に郷里柏原着。九日に祖母三十三回忌に参列。八月、遺産折半の交渉。

二十五日曇り草津道の記

卯う一点いってんに久松町を立ちて、糺かうじまち町なる河内屋武兵衛と

いふ人を誘ひて、同行どうぎやう四人、雑司ざふしやヶ谷にかかる。皆々

行く末の安堵あんどならんことを鬼子母神きしぼじんに祈る。

顔ぬらすひたひた水や青芒あおすすき

ながあめ うるほ

霖雨れんうの潤うるほひに土ぬかりて、歩行かち心にまかせず。

ぬれ臍すねにへたとひつつく藪蚊やぶかかな

板橋いたばし、上練馬かみねりま、上ねりま村（大山道あざ字野山）道あり、白子しろこ

駅ちうじきにて昼食す。板橋より一里八町といふ。膝折ひざおじ駅とい

ふあり。昔、鬼鹿毛おにかげといへる馬の脛折すねりし所といふ。

いかなる逸物いちもつにやありけん、今の代よまで里の名によぶ。彼の畜生界ちくしょうかいにてもほまれなるべし。その屍かばねを葬はうむりて、印しるしを植うゑて鬼おにかげ松といふ。暑き日や籠かごはめられし馬の口かご野火留のびどめの里は、昔男むかしをとこの「我われもこもれり」とありし所と聞くに、そのあたりには思はれてなつかしく、此の辺り西瓜すいくわを作る。

瓜うりむいて芒すすきの風に吹かれけり

往還わうくわんより南に平林寺へいりんじといふ大寺あり。大水樋おほすいひありて、寺を通

りて村中むらなかに入る。大和田、藤久保、大井駅、亀久保、藤間など

過ぎて、川越入口坂を烏頭坂うとうざか。ここにシベイ塚うづかといふあり。そ

のかみ何某なにがしどのの姫君、従者じゅうしやあまた具して上州榛名山じやうしゅうはるなさんに参り

給ひけるに、姫いかに思ひけん、絶頂ぜつちやうの沼に身投げてうせ。

かくて守護なせる者ども、魚うおの水に放たれ、鳥はねの羽うしなひた

るやうに思はれて、館やかたへ返るもよしなしとて、髪そりこぼや

かたちて、姫の菩提弔ぼだいとむらひける塚となん、里人のかたりける。

しかるに、姫はかの沼の蛇となりて、六月氷みなづきこほりを降らせけるに

も、この村々の人々「シベイ領、シベイ領」と唱へ、又書きて

田畠に立つれば、その災いを除くとかや。我々も行く末、雨な

からんことをいのる。城下入口松江まつえ通りを過ぎて、あかしや伝

次郎に泊まる。

二十六日雨昼より晴れ
寺山、宿料しゆくれう、網代あじろ、志垂したり、福田などいへる村を過ぎ

て、渡舟あり。入間川の末なりといふ。ここにては荏草川えぐさ。上

伊草・下伊草えぐさという里あり。川を渡りて少し東、中山領とい。

ここに秋本の陣屋あり。戸森ともり・古凍村ふるこほり、ともし岩殿山いはどのさんへの道

あり。柏崎、野本村、野本原、又生首が原。昔追ひ剥ぎ住み、

夜ル夜ル人を殺せしより、かく名づけしといふに、とある木陰

も気味わるく、
涼風すずかぜに立ちふさがりし茨いはらかな

この原より左へ入つて五町ほど、矢弓やきゅう稻荷とて、十年ばかり

前かたはやり給ふ神おはしけるが、五尺ほどの華表とりゐいくそばく

社やしろのうらに積みかさぬ。松山駅にて中食ちゆうじきす。平村念仏堂の前

に雨やどりす。兜山村かぶとやまむら、ここにかぶと山伴七とて、聞こゆる

富家ふうかあり。この間村々ありて、荒川の舟渡し越しわたりて、

久下村くげ林屋勘六に休む。これより中山道なかせんどう、熊谷堤くまがやつみに上がりて

熊谷駅。

千代村といふ宿にて迹あとの人待たんとしたりけるに日いまだ未の歩み少し過ぎたるなれば、深谷までといそぐ。ひつじ同行一人あり。川越領大井村より一里東福岡、川岸紋二郎といふ舟乗りにぞありける。深谷橋屋に泊まる。

二十七日晴れ

ゆききの人に「笠ぬげ、笠ぬげ」と呼ばはる声、近よりて見れば、赤地あかちちりめんの肌着して、三人揃ひたる罪人囚人かこ、籠より

銭を蒔いて乞食にとらする。本庄駅に金鑽宮かなざなぐうといふ大社あり。

別当真言宗威徳院といふ。おほやしろべつたう新町中島屋松五郎に休む。

高崎より本郷といふ村まで二里四町、四十八文にて馬に乘る。

室田むろたへ一里八町、又三ノ倉駅を過ぎて、群馬郡ごほり浜名など通り

て、上野原うえのはら獵師次郎左衛門に泊まる。

深谷より十三里十八町となんいふ。これ榛名山の下なり。

蚊の声や足を伸ばせば草の原

二十八日雨

門かどを出る日より胸につかへし、山ぶみする日はけふなりけりと、はき替へのわらぢなど用意す。

山神やまがみの物とがめかよ袖の蛭ひる

姫百合ひめゆりの咲々蛭さくさくに住まれけり

なでしこの花の蛭にぞさされけり

行くこと五十町にして、八本松はちほんまつといふ茶屋あり。汗をさまし

て、なでしこの折りふせらるる清水かな

ハルナ町に入る。坊々は雲霧かかりて、安居あんごいちげ一夏の鐘声しょうせい谿たに々

にひびきて、胸の雲忽たちまちはるる心ちして、川音松風もおのづ

から御法みのりを修する様やうに覚えて、さながら仙窟せんくつのおもぶきなり。

香篝散犬かうじゆさんがなめてや雲の峯

其角

鶯 うぐいす

もとしのよらぬや山の酒

一茶

岩のしたたりの、とくとくと落つる谷をへだてて、石の不動の像を彫りて、けふ開眼行なふとて、わざわざ登山とうせんの人もありけり。幸いに来かかるこそ本意ほんいなれ。誦經ずきやうの筵むしろに逢はんと思へど、無縁の者は坊に一夜をゆむえんるさず。ちからなくもやみぬ。

芒すすきから菩薩ぼさつの清水流れけりすすきぼさつ

山清水守らせ給ふ仏かな

岩に添うて過ぐれば、ハルナの神の社ありて、神樂所かぐらどころの刃の舞など、所がらず吹く風もかみさびて見ゆ。やいば

夕立ゆふだちにとんじやくもなし舞まひの袖

夏山や目にもろもろの草の露

又迹あとにもどりて、茶屋より右に下りて行き、山の番所を過ぐるに、波森へうべう々として閑しづかに、雲片へんぺん々として水底いそぐ御池あ。

十町四方もありなん。又渚の辺りに松一群ひとむらありて、青苔石せいたいにおひ、悲風芒ひふうすすきにこたふ墓あり。これ川越とおなじきシベイどのの塚といふ。草かき分けて池の水など手向くる。

片袂芒かたもとすすきの風に荒れにけり

身を投げし姫のゆかりの築きぬらん、竜体院りゆうたいいん自性じしやうり大姉とあり。一度は波底ひしたびの竜女りゆうにょなるも、終には天上の仏果を得たらん。とある石の上に昼飯す。

痩やせ脛すねや涼めば虻あぶに見込まるる

四里ばかり山を下りて、長藤村ながふちに出る。大戸平村ど、大戸の入口より右に入つて、橋を渡りて漸く本道に出でたり。稲田いなだ駅

に休む。峠を越して、須賀尾駅高橋屋に泊まる。

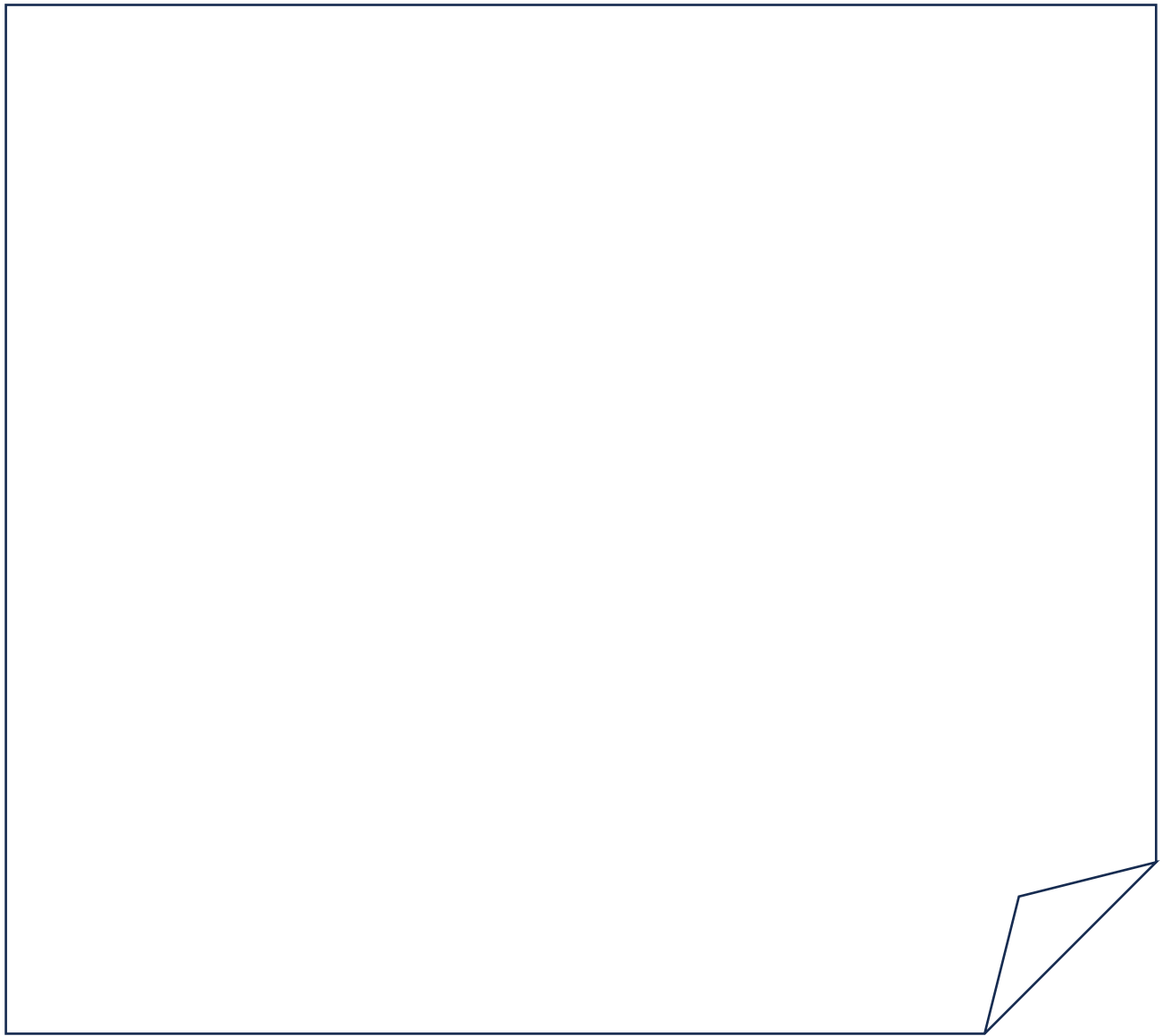
麦わらのマンダラもおれ笹根山

二十九日

長野原など過ぎて、草津の雲嶺庵うんれいに入る。十八年へだたりての

再会なり。諏訪の若人じやくじん・匏宇ほううに逢ふ。

《畢》



報告 出井あや子